「沖縄戦没者の尊厳を守る」

市民団体代表 高谷和生 66歳（玉名市）

過日の事だが、2008年名古屋で開催された第12回戦争遺跡保存全国シンポジウムの分科会で、沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんから、沖縄で今だに2000体以上が眠っている戦没者遺骨収集の現状を聞いた。会場には収骨作業で出土した砲弾破片等に混じり、全身骨で発見された日本兵遺体の傍らにあった「小さなお守りの観音像」も置かれていた。指先で触れると、胸が締めつけられた事を鮮明に覚えている。

沖縄戦では、県民の約4分の1の18万人が犠牲となったが、国は「遺骨収集はほぼ終了した」として、戦没者の収骨は今も具志堅さん達民間にゆだねている。

3月、那覇市の沖縄県庁前で、具志堅さんが沖縄本島南部の遺骨混入土砂の採取「断念」を政府に求めるハンガーストライキに入ったとの報には驚いた。その後、4月には沖縄県議会が「遺骨の交じった土砂を埋め立てに使うことは許されない」とする意見書を可決したという。特に激戦だった南部地域は収骨が十分ではなく、辺野古新基地建設への賛否とは別に、その地域からの土砂採取は沖縄県民の感情からも人道上からもありえない。

第六師団終えんの地であるブーゲンビル島をはじめ、太平洋戦争に関わった戦没者の遺骨収集は国の責務である。「戦後76年目」6月23日の「沖縄慰霊の日」をむかえるなか、国は「戦没者の尊厳を守るため」沖縄本島南部地域の遺骨混入土砂採掘を断念し、沖縄県民や国内外の遺族の心に寄り添ってほしい。